

30328 ✓

教科書文庫

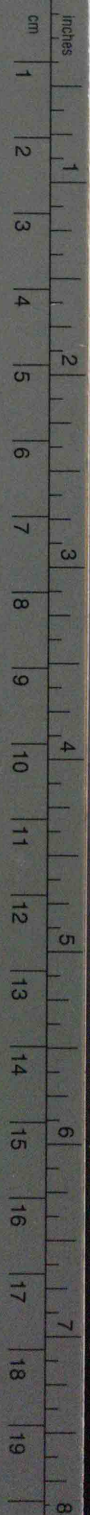
3
815
41-1901
2000 202337

Kodak Gray Scale

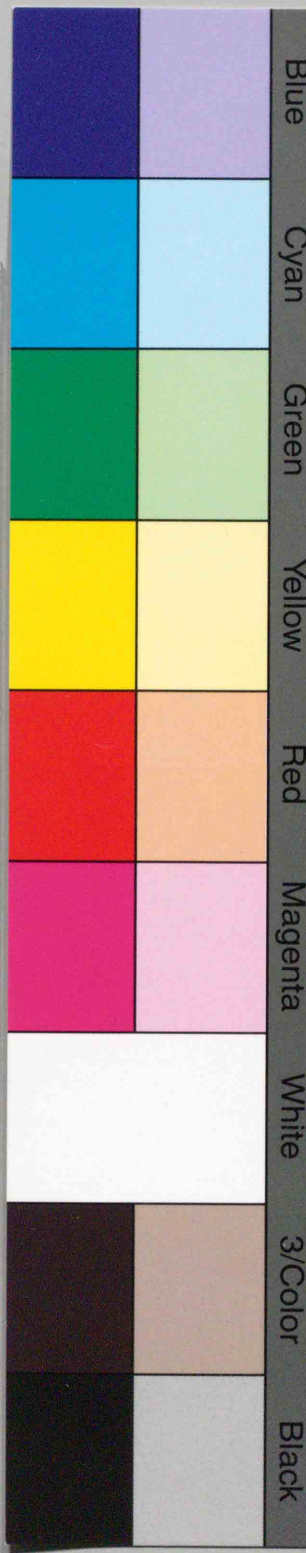
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches



© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Mi20  
資料室

普通文法教科書  
中卷



資料室

395.9  
M120

東京大学  
文学部  
国文学科  
蔵

東京大学  
教  
21206  
圖書

普通文法教科書中卷目次

言語篇 (承前)

第九章	形容詞の法	一
第十章	動詞の法	二
第十一章	活く助辭	二九
一	性	二九
二	否定	四一
三	時	四六
四	推量	六八
五	希望	七二
六	指定	七三

Handwritten notes and signatures, including "Ito" and "H. Maximoto".



普通文法教科書 中卷

言語篇 承前

第九章 形容詞の法

○終止法、第三段(第四段、第五段)

花 美し。 山は高し。

右の 美し、高し は事柄の意味を結び止めたるなり、かく語を終止するには、第三段を用ふれども、上に  
テ なん や かなどの助辭ある時は、特に第四段を  
もて結ぶ。

雪 列 白き、 花 なん 美しき。

普通文法教科書中卷



目次終

七 比況	七七
第十二章 活かぬ助辭	八〇
一 名詞代名詞にそふもの	八〇
二 種々の詞にそふもの	八九
三 動詞形容詞にそふもの	一〇一
四 感動を表すもの	一〇九
第十三章 接頭語接尾語	一一三
一 接頭語	一一三
二 接尾語	一一四

彼や 賢き。 孰か よき。

尚、こそ のある時には第五段をもて結ぶ。

花こそ 美しけれ。 山こそ 高けれ。

左の文の口語を文語に直せ。

水 清イ これが 白イ

こゝは 騒シイ 晝も 寂シイ

我ぞ 強イ これや よイ

誰か 賢イ 彼なん 貧シイ

春こそ 樂シイ 冬こそ 寒イ

○中止法。副詞法。第二段

山、高く(シ) 水 清し。 秋の 夜こそ 樂し

月 清く(キ) 風 涼しき。 秋の 夜こそ 樂し

けれ。

識 博く(ケレ) 徳 高ければ 世に 重せらる。

右の 高く 清く 博くなごは下に在る法に應ずる

ものにて、暫、其の意を中止したるなり。

高く 聳ゆ。 多く 食ふ。

右の 高く 多く は副詞に用ひられたるものなり。

第二段の く はうに發音せらるゝとあり。

高う 聳ゆ。 久しう 逢はず。

烈しう 降る。 早う 行け。

かく く を う に變ずるを音便といひて、古より

用ひられたり。是等を ぶ とかき誤るとあれば注

意すべし。

早ふ。起きたり。烈しふ。降りぬ。  
久しふ。逢はず。高ふ。聳江たり。

○連體法・名詞法・第四段

高き 山が 見ゆ。

清き 水が 流る。

右の 高き 清き は名詞に連る法なり。第四段は

心短き 彼は 直に 怒り出せり。

君子は 位 高ければ 高き 程 益 慎む。

なを總べて語尾に變化なき體タメの語に連る。

善きモノは 取られ、 悪しきモノは 捨てらる。

高き處に 登り、 遠き處を 望む。

右の 善き 悪しき 高き 遠き なは名詞とし

何やカサヨオカセ

はたはち  
程のオカセ

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

て用ひられたるものなり。

第四段の き は い と發音せらるゝとあり。これ

亦音便なり。

善い 人。 高い 山。

美しい 花。 遠い 處。

哀しい 哉。

音便にて い とかくべきを お ひ など誤ると

あり。

面白い 話を 聞きたり。

苦しい 仕事を 言付けられたり。

善る 事を なしたり。

樂しひかな。 恨めしひ 事かな。

○假定前提法・第一段にはを添ふ。

安くは 買はむ。

暑くは 涼まむ。

右の 安くは 暑くは は事柄を假にいひて買はむ。涼まむの前提となりたるなり。之を順態といふ。はの代に とも を添ふれば、反對の結果に連る。之を逆態といふ。

安くとも 買はじ。

暑くとも 涼まじ。

○確定前提法・第五段にはを添ふ

安くれば 買ふ。

暑ければ 涼む。

右の 安くれば 暑ければ は事柄を確實に云ひて買ふ。涼むの前提となりたるなり。

はの代に ともを添ふれば反對の結果につゞく。前のを順態といひ後のを逆態といふと假定前提法と同じ。

安くればも 買はず。

暑ければも 涼まず。

善	語根	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
く	く	く	し	き	けれ	
假定	中止	終止	連體	確定		
	副詞		名詞			

左の文中、誤を正し、且、口語を文語に直せ。

- 一、 苦しむ 事に堪へ得ずは、大業を 成し遂ぐる 事 能はじ。
- 二、 己を 正しふして、後に 人を 正しふす。
- 三、 花 咲く 春ころ いと 樂し。
- 四、 世に眞に強ひ 人ヲ 少イ。
- 五、 白る 花なん いと 美し。
- 六、 君は 早イ。 僕ヲ 遅イ。
- 七、 北清の 冬は 朔風 甚 寒イ と 聞く。
- 八、 この 道ヲ 遠イとなん。
- 九、 吾こそ 正しイと いふ。
- 十、 悪しひ 事は 小事なりと雖 すべきからせ。

- 十一、 あはれ いたましひ 事かな。
- 十二、 樂しふは 存ずれども、罷出づる こと 叶ふまじ。
- 十三、 烈しふ 降る 雨に 全身 ぬれたり。
- 十四、 自 願みて 正しイナラ、誰をか 恐れむ。
- 十五、 君は僕より 賢イカラ、常に 上席に あり。
- 十六、 我が 國が 支那ほど 廣ければ、世界を 併呑せむ こと 容易なるべし。
- 十七、 吾 若 若ければ、尚 奮發すべし。
- 十八、 假令 若けれども、勉強する こと 叶ふまじ。

十九、若 近ければ 行かむと 思ひたれど、  
遠ければ 行かず。  
二十、行く 人 多イナラ、吾も 行かむ。さ  
れど 若 少ければ 行くまじ。  
廿一、かの 山 低くはころ 月の 出づる  
事も 早けれども、若 高ければ、さす  
遅からむと 思はる。  
廿二、かく 花が 多くはころ 美しい。若 少  
イナラ、いと 寂しかるべし。  
廿三、今年は 甚 寒くは、風引く ものぞ  
多イ。  
廿四、我が 大和櫻は 百花の 中にて も いと

ゞ 美しいけれ。  
廿五、雨 降り、風 吹く 夜ぞ いと も す  
さまじけれ。  
廿六、己 假令 善けれども、人を 誹るは  
いと 悪し。  
廿七、彼 若 高ければ 五尺、假令 低くけ  
れども 四尺九寸に 下らざるべし。  
廿八、假令 金なけれども、學識たに あらは  
何をか 憂へむ。  
廿九、久しふ 逢はさりし 人に逢ふこそ い  
と 楽しい。



第十章 動詞の法

○終止法・第三段(第四段第五段)

鳥 鳴く。花 落つ。

馬 馳す。月を 見る。

右の 鳴く 落つ 馳す 見る は事柄の意味を結  
び止めたるなり。

かく語を終止するには第三段を用ふれども、上に  
なん や か などの助辭あるときは第四段にて終  
止す。

鳥が なく。月をなん 眺むる。

花や 落つる、誰か くる

又、こそ あるときは第五段にて終止す。

鳥こそ 鳴け。花をこそ 眺むれ。

左の文の誤を正せ。

雨が 晴れる。雨こそ 晴れる。

賞與を 受ける。

早く 起きる。遅くこそ 起され。

水が 盡きる。山が 聳ゆ。

人が くる。塵を 捨てる。

一に 二を 加へる。私も 勉強する。

花をこそ 見る。花をこそ 愛す。

吾が 月を 賞す。國が衰ふる。

人が 飢はる。

○中止法・名詞法 第二段

花 咲き(ク) 鳥 鳴く。

文を 學び(ブ) 武を 練る。 人ぞ 頼母しき。

雨 降り(レ) 風 吹けば、いと 物寂し。

右の 咲き 學び 降り は下に在る法に應ずるものにて、暫、其の意を中止したるなり。

九段は ながめ よし。 木挽キマキが行く。

戦が 始りぬ。 幕を もつ。

あふぎ扇 賣捌 卸賣 取引 ゑかき 物語

綱引 賄

右は第二段を名詞としたるものなり。

第二段は他の動詞或は形容詞と結び付きて熟語となる。之を連用法といふ。用とは體に對して語尾の變化あ

る動詞形容詞等をいふ

咲き亂る 打ち殺す 行き違ふ 賣り捌く

書きにくし 讀み易し 待ち遠し

第二段が助辭のてなりに連るときは、其の發音を變ずるとあり。之を音便といふ。

咲きて 咲いて 咲いたり

待ちて 待つて 待つたり

釣りにて 釣つて 釣つたり

思ひて 思うて 思つて 思うたり

死にて 死んで 死んだり

讀みて 讀んで 讀んだり

飛びて 飛んで 飛んだり

音便は、イ、ウ、ツ、ンに限る。さるを左の如く誤るゝあり。

咲ひて 思ふて 讀むて 死むたり

○連體法・名詞法・第四段

行く、人あり。

流る、水を汲む。

散る、花が忙しき。

右の行く、流る、散るは名詞に續く法なり。此

の外すべて體の言に連るゝ形容詞の連體法と同じ。

讀む(コト)は 書く(コト)より やすし。

人の 見る(コト)を 禁む。

勉強する(コト)は 己の 爲なり。

馬の 走る(トコロ)を 見たり。

右の 讀む、書く、勉強する、走るは名詞として

用ひられたるなり。

第四段は名詞に續く法なるに

學ぶの、必要あり。花を 觀るの、記。

友人を 送るの、文。

なごの、を添ふるはひがごとなり。

左の文の誤を正せ。

木を 植ゆ時、 水が 盡く時、

早く 起きる 人、 よく 案じる 時、

賞與を 受ける時、 山の 見える 處、

落ちる 花、 流る 水。

早く寝ねる人。よく吠へる犬。  
人を用ゆる者。困難に堪へる心。

○假定前提法。第一段にはを添ふ。

花 咲かば、鳥も 鳴かむ。

雨 降らば、草も 萌江む。

右の 咲かば 降らば は事柄を假にいひて鳴かむ

萌江むの 前提となりたるなり。

第三段に とも を添ふれば反對の結果につゞく。

花が 咲くとも、鳥は 鳴かじ。

君は 行くとも、われは 行かじ。

○確定前提法。第五段にはを添ふ。及第する とも 能はじ。

四段活用

民 富めば、國 富む。

雨 降れば、地 霑ふ。

右の 富めば 降れば は事柄を確にいひて富む霑

ふの前提となりたるなり。

は の代に とも、を添ふれば反對の結果につ

民は 富めども、國は 富まず。

雨は 降れども、地 霑はず。

左の文の誤を正し、且、口語を直せ。

若 人が くるナラ、直に 知らせよ。

假令 死ぬれども、降るまじ。

若 君が くれれば、われも 行かむ。

われも 行くカラ 君も き給へ。  
假令 君は くれども われは 行くまじ

○命令法

早く 行け。 ま幸く あれ。  
速に 起きよ。 人を 迷す 者は 早く 死ね  
塵を 捨てよ。  
之を 見よ。

右の 行け 起きよ 捨てよ 見よ は其の動作を  
命令或は希望する意なり。

命令法は、四段活ヲ行變格は第五段、ナ行變格はね、上下  
一二段活、カ、サ行變格は第一段によを添ふ。(よは第五  
段のにも添ふとあり、第一段のにも添はざるとあり。)

		語尾	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
喉	か	き	く	く	け		
假	定	中	止	終	止	連	體
名	詞	名	詞	命	令		
		定	確	定			

左の文の誤を正し、且、口語を文語に直せ。

- 一、新玉の 年を 祝るまつる。
- 二、かしこに 家も 在る。
- 三、家に いては 父母の れし江に 従ふ。
- 四、衣服の 悪しきを 耻じる 者は 共に 語る  
に 足らず。
- 五、舟を 傲ふて 筑水を 下る。

- 六、よく 思ふて 後にこそ 行ふ。
- 七、課業を 終りて 運動せむ。
- 八、運動が 終えは 勉勉せよ。
- 九、かしこに 高ふ 見えるは 富士山なり。
- 十、人を恨みる事 勿れ。又 天を 尤める事 勿れ。
- 十一、氷の 融ける 時は 春 立つ 初なり。
- 十二、天氣 晴れる 日が 心地 よし。
- 十三、恩を 受ける 時は 報ふる 事を 忘れる事なくやう 心掛くべし。
- 十四、習ふは 易く 教へるが 難し。
- 十五、死ぬ 事は 易く 困難に 堪ふ 事は 難し。

- 十六、こゝに 塵芥を 捨つ 事 勿れ。
- 十七、遠く 友を 訪ふて 逢はぬも いと つらき。
- 十八、泉流を 汲むで 茶を 煎るは いと も 樂しき。
- 十九、窓を 開いて 明月を 望むが 面白し。
- 二十、過を 改むに 憚る 人は 善に す べし 事 能はず。
- 廿一、久しふ 逢はざりし 人に 逢ふて 往 時を 物語るこそ いと 興 あり。
- 廿二、度々 習ふても 之を 忘れるは 心を用

將然段へば  
やつとれば段  
定  
已然段へば  
なつとれば段  
定

いざるが 爲なり。

廿三、捨てる 命は 惜しからねど 事を 遂

ぐと 叶はざりしぞ 口惜し。

廿四、稻は 春 種まき 夏 植えて、秋の

末に收める ものなり。

廿五、明日 くと いふて おこしたり。

廿六、心たに 正しければ 人に 耻ぢる 事

あらざるべし。

廿七、若 勉強すれば 及第せざる ことあ

るべき。

廿八、私は 行きたしとこそ 思ふ。

廿九、夜の 明けるを 待ちて 行かむとぞ、

思ふ。

三十、君が くるナラ 僕も 行かむ。

三一、彼は よく 人を 用い また よく

人を 教ゆ。

三二、假令 戦へども 勝つ と 能わざらむ。

三三、假令 死ぬれども 悪事は 行ふまじ。

三四、若 及第致し候へば 直に 歸郷仕るべ

く候。

三五、彼は よく 勉強スルカラ 必 及第せむ。

三六、花を 見るの 記を 作れり。

三七、家の まはりには 樹木を 植えること

よき。

三八、國民の 元氣 衰へる 時は 其の 國  
 亦 亡びるに 至るべし。  
 三九、大厦の 倒れるを 一木にて 支へる  
 事 難し。  
 四〇、猿も 木から 落ちるところを いふ。  
 四一、よく 馳せる 馬に 打乗りて、川岸に  
 添ふて 行きたり。  
 四二、老いて 後 悔いる 事 なき やう  
 若ひ 時に よく 勉めるこそ よい。  
 四三、若 學校を 卒業すれば 實業に 就か  
 ると 思へり。  
 四四、若 晴るれば 行かむと 思ひたれば、

降るカラ 行かず。  
 四五、上達せむと 思へば 須 勉強せ。  
 四六、吾も 行くカラ 君も 行  
 四七、我 此の 學校の 業を 卒エルナラ  
 高等學校に 入らむ。  
 四八、明年は この 學校の 課程を 終ルカ  
 ラ 東京に 行かむと 思へり。  
 四九、あすは 暇が あるカラ 參上せむ。  
 五〇、あす 暇 あるナラ、き給へ。  
 五一、今日 釋迦が 生レルナラ、如何にして  
 衆生を 濟度せむか。  
 五二、假令 孔子 再生すれども、今日の 支



- 五三、 那を 如何せむ。 耶蘇 若 再生すれば 尙 天國を 説くや 否や。
- 五四、 人が 千年も 生キルナラ、 人口が 如何に 増すならむ。
- 五五、 吾 如何に 勉強するとも 首席を 占める事 ひとつかしかるべし。
- 五六、 若、 外敵と 戦へば 我輩 亦 出陣せむ。
- 五七、 假令 戦争 あれども 恐れるに 足らず。
- 五八、 この 汽車にて 参る 筈に候へども、 昨夜の 雨風 烈し候はば、 如何あらむと存居候。 若、 無事安着仕り候えば、 直に 御報知 申上ぐべく、 左様 思召下され度候。

第十一章 活く助辭

一、 動詞の性を表すもの。

○使性 す さす しむ

人に 書を 讀ます。

人に 塵を 捨てさす。

右の す さす は人をして動作をなさしむる意なり。

す は第一類四段活と第六類のナ行、ラ行變格との第

一段に屬く。は其の他に屬く。  
さす は通じて各類に屬く。  
しむ

○す さす しむ の活用及其の法

助詞一段	助	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
讀	ませ	せ	す	する	すれ	
捨	てさせ	させ	させ	させる	させ	
	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	

終止法

書を 讀ます。

書を予 讀ます。

書をこそ 讀ます。

中止法

書を 讀ませ、字を 習はす。

連體法

書を 讀まする事あり。

假定前提法

若 書を 讀ませば、賢き 人と ならむ。

假令 書を 讀ますとも、賢き 人と ならじ。

確定前提法

書を 讀ますれば、賢き 人と なる。

書を 讀ますれども、賢き 人と ならず。

命令法

書を 讀ませよ。

さす しむ の法皆すに同じ。

○被性 する らる

人に 恵ま<sup>る</sup>る。

人に 捨て<sup>ら</sup>るる。

右の する らる は他より動作を仕掛らるゝ意なり。

る は第一類四段活と第六類のナ行ヲ行變格との第一  
一段に屬く。

らる は其の他に屬く。

○る らる の活用及其の法

捨	恵	勳助 助辭 一段	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
て	ま		れ	れ	る	る	る
ら	れ		れ	れ	る	る	る
れ	れ		れ	れ	る	る	る
ら	れ		れ	れ	る	る	る
れ	れ		れ	れ	る	る	る

終止法

人に 恵ま<sup>る</sup>る。

人にぞ 恵ま<sup>る</sup>るゝ。

人にこそ 恵ま<sup>る</sup>るれ。

中止法

甲に 恵ま<sup>れ</sup>、又 乙に 恵ま<sup>る</sup>る。

連體法

人に 恵ま<sup>る</sup>るゝ 事 あり。

假定前提法

人に 恵ま<sup>れ</sup>ば、吾 亦人を恵ま<sup>む</sup>。

人に 恵ま<sup>る</sup>るとも、之に 報ゆ<sup>る</sup> 事 叶は

じ。

確定前提法

人に 恵まれるは、吾亦 人を 恵む。  
 人に 恵まれるは、人を 恵む 事能はず。

命令法

人に 恵まれよ。

らる の法 るに同じ

○能性

船にても 行かれ、瀛車にても 行かる。  
 筆にては 書かれるは、鉛筆にては かくれず。  
 一年級には 入らるは、入らじ。  
 幼年到に 入らるは 入らむ。

中學卒業生は 無試験にて 入學せらるゝ 規定あり。

右は動作の出来る意なり。

過ぎし 昔ぞ 忍はるゝ。

子供の おひ立つ さきぞ 思はるゝ。

古郷の 空こそ 慕はるれ。

右は動作の自然に然なる意にして同じく能性なり。  
 能性を表す る らる の活用は被性のに同じ。

○敬性

父上は 東京に 行かる。  
 兄上は 高等學校に 入學せらる。  
 母上は 家に 在りて 弟の 妹を 育て給ふ。

音便、四ウ

イラ、ウツ

連用段、他は

カ、シ、ト、シ、カ、ニ、フ

カ、カ、ナル、事、ト

形、家、調、の、止

法、は、連、同、終

ト、ヘ、ク、イ、タ、フ

何、然、説、ハ、心、を

つ、く、り、時、は、其、も

正、然、説、ハ、心、を

つ、く、れ、下、過、去、と

右の る らる 給ふ は尊敬の意なり。  
敬性を表す る らる の活用法は被性の同じ。  
給ふは第一類の活用にして、こゝにては助動辭とし  
て第二段に屬くものなり。

又

勅語を 下 させ 給へ

殿下 軍艦に 乗込 ませ らる。

外國より 贈呈 したる 勳章 を 受け させ らる。

右の せ 給へり せ らる させ らる は敬意の重きものにして、せ させ は使性の助動辭の形なり。

左の文の誤を正し、且助動辭の種類を區別せよ。

一、余は今日 寫眞 を 寫 さする。

二、若 彼 に 書 を 讀 ますれば 上 達せむ。

三、彼は 假令 書 を 讀 まするとも 上 達せむ 望 なし。

四、人 に 排斥 さるゝ 身 こそ つ らさ。

五、若 英 と 露 と 戦 はさしめて、其 の 疲 れたらむ 時 に、我 大 舉して 之 を 討 伐すれば、彼 等 必 や 戦 はずして 降 らむ。

六、若 清 露 に 攻 撃されるれば、我 が 國 は 之 を 救 はむか。

七、親に 安 心さす や う 心 掛くべし。

八、我 い ふて 人 になん 筆 記さする。

リ、テ、ヤ、シ

- 九、毎日 掃除さすればこそ かく 奇麗なれ。
- 十、假令 如何に 勉強さするとも、及第させむ。事 難かるべし。
- 十一、若、及第させむと 思へば、毎日 勉強させよ。
- 十二、人をして 己を 尊ばさむと 思はば、まづ 徳を修むべし。
- 十三、自 卑めて 後 人に 卑めらるゝ。
- 十四、假令 人に 毀らるゝとも 何ぞ 痛まむ。
- 十五、人に 疑はれる こと なき 様 注意すべし。
- 十六、毎日 教授さるゝ 事の 半たも 覚え

- 侍らす。
- 十七、若 堪えられぬほど 烈しく 使役さるれば 直に 逃げ歸らむ。
- 十八、如何に 辨解さるゝとも 最早 甲斐なからむ。
- 十九、若、賛成さるれば 直に 知らせられよ。
- 二十、昨夜は 隣の 人に 騒がれて 安眠されざりき。
- 廿一、あかす 勉強さるゝ 方法を 教えられよ。
- 廿二、庭を 掃除させらるゝは 厭はねど 勉強されぬぞいと 口惜し。

廿三、行く先の事共案じられて眠られず。  
 廿四、明日より上京さるゝ由通知さる。  
 廿五、梅が香を櫻の花に匂はして柳  
 の枝に咲かさは如何に。  
 廿六、萱草は物を忘れさしむるといふ。  
 廿七、才に任して長者を凌ぐは不徳の  
 行かど存じられ候。  
 廿八、他を困らさせて喜ぶは不仁なり。  
 廿九、彼の如き破廉耻漢をして大臣の  
 位を歴せしめたるは誰の罪ぞ。  
 三十、耳目を喜ばせしむるのみ。  
 ○使性を被性とすることあり。使性を被性とすることあ

り。使性被性能性を敬性とすることあり。

河邊瓊岳軍畧を失し調伊企難をして敵に捕へられしめたり。

父子を母に抱かれさす。

官命にて清國に行かせられたり。

柔弱なる生徒先生に強ひて運動せしめられたり。

侍臣をして論語を講せしめさせ給ふ。

父君子の君に先立たれ給ひぬ。

故郷の事など切に思ひ出せられさせ給ふ

順徳院は佐渡に遷されさせ給へり。

二、動詞形容詞等に属き否定するもの。

○す

花 咲かす。

これは 美しからず。

右の「す」は動作形状等を打消す意なり。口語の「す」

ナイなり。

すの活用及其の法、

美しからず	す	す	ぬ	ね
咲か	第一段	第二段	第三段	第四段
				第五段

終止法

花 咲かす。

花が 咲かぬ。

花こそ 咲かぬ。

中止法

花も 咲かす、また 鳥も 鳴かすは 春の

心も 長閑からまし。

連體法

花の 未 咲かぬ 枝を 折りて 歸りき。

假定前提法

花 咲かすば 鳥も 鳴くまじ。

花は 咲かすとも 鳥は 鳴かむ。

確定前提法

花 咲かぬは、鳥は 鳴かす。

花は 咲かぬとも、鳥は 鳴く。

○さり



○去年は 此の花 かくは 咲かざりき。  
 右のざりはズアリの約りたるにて打消す意なり。  
 ざりの活用及法

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
咲	かさ	らざ	りざ	りざ	るざ
					れ

ざりには終止法、中止法なし。他はずに同じ。

○じ

花は 未 咲かじ。  
 負けじと すまふ。

右のじは打消の意の弱きものなり。口語 マイの意に近し。

じは活用なし。されど終止法の外に連體法あり。ものといふ一語に連る。

取られじものと 争ひたり。

○な

悪しき ことは すな。  
 受くまじき 物を 受くな。

右は動詞の第三段(ラ行變格)にては第四段に添ふものにて打消の命令即禁止を表すものなり。此のなは又動詞の上に居ることあり。その時は動詞の第二段(カ行サ行變格)は第一段の下に通例 を添ふ。

花を な折りを。  
 怠り なせそ。

悪しき者はな<sup>コ</sup>來<sup>ク</sup>そ。  
 なを第四段に添へてするな 受くるな などいふ  
 は誤なり。

三、形容詞、動詞等に附き時を表すもの  
 形容詞の時

○現在

花 美し。 雪 白し。

右は現に然る事、又一般に然る意なり。

人 多かり。

右も現に然る意なり。 かり は クアリ の約なり。

かり の活用及法

活用	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
	か	ら	か	り	か
	り	か	り	か	る
	か	れ			

多 <sup>ホ</sup>	終止法	人 多かり。
		人ぞ 多かる。
		人こそ 多かれ。
	連體法	人 多かる 處ぞ 面白き。
	假定前提法	人 多からば、 樂しからむ。

確定前提法  
 人 多かれば、 樂しかり。  
 かれはけれと其の意同じ。

○未來・む  
人　こそ多けれ。人多ければ天に勝つ。

人　多からむ。

右は未現れざる性狀を想像したるなり。

むの活用及法

	活用	一	二	三	四	五	段
多から	○	○	む	む	め		

終止法

人　多からむ。

人ぞ　多からむ。

人こそ　多からめ。

連體法

人の　多からむ　事を　望む。

めは順態前提法となることなれば古文には逆態に用ひたり。

明日の　祭禮には　人出　多からめ。余も　行き見む。

未來の助動辭は現在の想像にも用ひらる。

○過去　き　けり　つ

人　多かりき。花　美しかりけり。

右は既に過ぎし意なり。

き　けり　つ　の活用及法

多かり	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
			き	し	しか

終止法

- 人 多かりき。
- 人ぞ 多かりし。
- 人こそ 多かりしか。

連體法

人が 多かりし。時は面白かりき。

確定前提法

人 多かりしかは 家も 狭かりき。  
けり つ の法は きに同じ。

○ 過去想像

けむ

去年までは 人も 多かりけむ。  
右は過ぎし事を想像する意なり。  
けむ の活用及法 む と同じ。

多かり	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
			け	む	け
			む	け	む
			む	け	め

○ 文語と口語

現在	文語	口語
現在	多し	多イ
現在想像	多かり	多クアル
未来	多からむ	多カラウ
過去	多かりき	多カツタ
	多かりし	多カツタ
	多かりしか	多カツタ
	多かりけむ	多カツタ

時

現在

現在想像

未来

過去

過去想像…多かりけむ 多カツタラウ  
動詞の時

○現在

雨が 降る。人が 行く。

右は今、動作する意なり

人は 死ぬ。水は 低きに 流る。

右は一般に然る意なり。是等も亦、動詞の現在といふ。

○未來

花 咲かむ

右は未、起らざる動作を想像したるなり。

ひ の活用は形容詞の未來のと同じ。

む と殆同じ意味にて まし といふことあり。普通

青繻のもの  
必ずせしむ  
よるすれにカ  
ク白く新尾  
変化なり

の文には多く用ひず。形容詞も同じ。

花 咲かまし。 國の爲に死なまし。

嬉しからまし。 命も 危からまし

まし の活用

咲		第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
か	ま	せ	ば	ま	ま	ま
か	ま	せ	ば	ま	ま	ま
か	ま	せ	ば	ま	ま	ま

終止法

連體法

花の 感に 逢はまし もの を、

連用法 或る形容詞に連る。用方極めて少し。

吉野の 花は 見ま欲しき かな。

徒に 生きて あらむ よりは 死なまく 欲す

前提法順態 第一段第五段ともに用ふ。

余 大臣に あらませば 謀る所 あらましを  
此の 事を 成さで 死なましかば 如何に  
くやしからまし。

○過去には三種あり

○第一過去 つ ぬ たり (近過去半過去現在完了)

花 咲きぬ。 花 咲きつ。

右は今動作が過ぎたる意なり。

花は 咲きたり。

右も動作が今過ぎたる意なり。且動作の結果が尙残りたる意にもなるなり。

我が 國は 三千年 以前より 續きたり。

右は動作が昔より今に打續きたる意なり、ぬ つ の活用及法

咲	き	第一	第二	第三	第四	第五
		段	段	段	段	段
て	な	に	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
つ						
る						
れ						

終止法

花 咲きぬ

花が 咲きぬる。

花こそ 咲きぬれ。

連體法

今 咲きぬる 花が 美しき。

假定前提法

確定前提法  
花 咲きたれば、鳥も 鳴かむ。

つ の法 ぬ に同じ。第二段は單獨に用ひず  
たりの活用及法

咲	き	た	助辭活用				
			第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
ら	り	る	れ				

終止法

花 咲きたり。  
花が 咲きたる。  
花こそ 咲きたれ。

連體法

花の 咲きたる 枝を 折りぬ。

假定前提法

花 咲きたらば 鳥も 鳴くらむ。

確定前提法

花 咲きたれば、鳥も 鳴けり。

○り

花 咲けり。 兒共 遊べり。

右は たり と同じく、テアリ の意なり。是は第一  
類、四段活の第五段と第六類のサ行變格の第一段とに  
添ふ。下二段活の語は 受けり 捨てり なさいふべ  
からず。注意すべし。  
りの活用及法

賞	咲	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
せ	け	ら	り	り	る	れ

終止法

花 咲けり。

花が 咲ける。

花こそ

咲けれ。

(有) 咲けり。 咲ける。 咲けれ。 咲けり。 咲ける。 咲けれ。

連體法

花の 咲ける

枝が 折れたり。

假定前提法

水 清めらば、 纓を あらはむ。

確定前提法

勉強せられ。 學問 進まず。

この第一、第二、第五段は用ひらるゝ事稀なり。

○第一過去想像

花、 咲きなむ。 咲きてむ。 咲きたらむ。

右は今過ぎたることを想像する意なり。而して又強き意味の未來にも用ひらる。

なむ は ぬ の第一段に む を添へたるなり。

たらむ は たり の第一段に む を添へたるなり

○第二過去

雨が 降りき。 雨が 降りけり。

右は今より前に過ぎし意なり。

○き けり の活用、及法は形容詞の過去の同じ。



第六類のカ行サ行變格の過去を表すには特例あり。

一 段	來 <sup>レ</sup> し	き	一 段	爲 <sup>レ</sup> し	き
二 段	し	か	二 段	し	か

終止法

人なん きし。こし。 花を 賞し。き。

人ぞ きし。こし。 花をぞ 賞せし。

人こそ きしか。こしか。花をこそ 賞せしか。

連體法

昨日 きし。こし。 人。 花を 賞せし。 時。

確定前提法

昨日 きし。か。こし。か。は。 花を 賞せし。か。を。

○第二過去想像 けむ

雨が 降り。けむ。

右は動作が今より前、過ぎしことを想像する意なり。

けむ の活用、法は形容詞の過去想像のと同じ。

○第三過去 にき てき たりき (大過去過去完了)

雨が 降り。し。 前に 歸り。にき。

余が 上京せし。 前に 彼は 上京し。たりき。

昨日 見て。し。 事を 語る。

右は過去より比較上前に過ぎし意なり。

にき てき たりき は第一過去の ぬ つ たり

の第二段に「き」の添りたるなり。その法「き」と同じ。

右の外に「て」たりに「けり」を添へて、第三過去を表すとあり。即、降りにけり 降りてけり 降りたりけり のごとし。

○第三過去想像に「けむ」て「けむ」たりけむ

余が 着きし 前に 雨や 降りにけむ、道いたくぬれたり。

余をば 恐れてけむ、戦はで 逃げけり。

余が 知りし 時は 人は 既に 知りたりけむ。

右は「にき」「てき」「たりき」の場合を想像する意なり。

り其の活用法は「か」に同じ。

○口語と文語

現在……………降る……………降る

未来……………降らむ……………降らむ

第一過去……………降りつ……………降ッタ  
……………降りぬ……………降ッタ

……………降りたり……………降ッテ井ル、降ッタ

時 第一過去想像

……………降りつらむ……………降ッタラウ  
……………降りたるならむ……………降ッテ井ルダラウ  
(降ッタラウ)

第二過去……………降りさ……………降ッタ

第二過去想像…降りけむ……………降ッタラウ

降りけむ……………降ッタ

第三過去……………

降りたりき……………降ッテ井タ

(降ッタツタ、降タツタケ)

降りけむ……………降ッタラウ

降りたりけむ……………降ッテ井タラウ

第三過去想像

(降ッタツタラウ)

左の文の誤を正し、且、口語を直せ。

一、我ズ 行かナイ。

二、行かナイ 者は 人に 輕蔑サル。

三、君が 行かナイカラ 吾も 行かナイ。

四、正成は 智勇を 兼ねり。

五、昨日 歸りタ 者ハ 幾人なるか。

六、昨日 聞きたる 事を 又 忘れり。

七、最早 誰も 行ッテ井ル。

八、汽車 今 出でり。

九、昨日は 何番汽車に 乗りタカ。

十、徒に 功を 成せし 人を 羨むべからず。

十一、勉強し、 甲斐ありて 優等にて 卒業せり。

十二、去年 貸せし 金を 受取りたり。

十三、多く 喧嘩し、 友との交は 最堅し。

十四、昨日 試験を 終ハツタカラ 今日ハ 歸る。

十六、先日 寫シタ 寫眞が 今 出來タ。  
 十七、是は 親友の 余に 寄し、消息なり。  
 十九、吾こそ 實に 強勉セナイ。  
 二十、君が 東京に 行イタカラ 次いぞ 吾々も 行ツタ。  
 廿一、くるマイと 思ひたれと 來れる。  
 廿二、彼は 先日 上京せし。  
 廿三、運動シタ 甲斐 ありて 病氣も シナイ やうになりたり。  
 廿四、去年も 寒カツタラウ。  
 廿五、この 木は 去年 植ヘタラウと 思はる。

廿六、昨日催促サレタカラ 今日 歸シタ。  
 廿七、父より 受ける 時計を 書物に代へり。  
 廿八、手紙に 金子を 添へり。  
 廿九、余が 着きし 時は 汽車は 出テ并タ。  
 三十、久しふ 逢はさりき 人が けふ きタ。  
 卅一、君が こナイカラ 吾も 行かナイ。  
 卅二、君が 支那に 渡りし 後にこそ 日清戦争は 始リタ。  
 卅三、彼は はや 異國の 土と なツタラウ。  
 卅四、今申シタ 事は 長く忘るゝな。  
 卅五、花が 咲きタナラ 見に 行かう。

卅五、限あれば 吹かねど 花は散るもの  
を 心せはしき 春の山風。

四、動詞につきて推量の意を表すもの。

○べし

あすは 雨も 晴るべし。

右の べし は推し量る意なり。

明日より 出校すべし。

右は命令の意ともなる。

君子と いふべし。

尊敬すべき 人なり。

右は可能の意なり。

國法には 服従すべき 義務あり。

右はセ子バナラヌといふ意なり。

○べし の活用及法。

晴	助詞	活用	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	
	る	べ	く	べ	く	べ	し	べ
			き	べ	け	れ		

終止法

花 咲くべし。

花ヲ 咲くべき。

花こそ 咲くべけれ。

中止法

花も 咲くべく 鳥も 鳴くべし。

連體法

余が 行くべき 處に 來給へ。

假定前提法 行くべきは 行かむ。

確定前提法

我も 行くべければ 君も 來給へ。

べし は べかりとも用ひらる。

行くべかりき 行くべからず。

○まじ

余は 行くまじ。 悪しき 事は すまじ。

右の まじ は推量して打消す意にて。口語の マイ

なり。

まじ の活用及法は べし に同じ。

○らむ らし めり

鳥が 鳴くらむ(らむ)

霞も 立つらし。

花も 咲くめり。(めるめれ)

右も共に推量る意なり。口語にて 鳴くダラウ 立ッ

ラシイ 咲くトミエルの意なり。

べし まじ らむ らし めり とも第三段に添ふ

べきものなれど、第六類ヲ行變格のみには第四段に添ふ。

らむ の活用法は む に同じ。 らし は文語にて  
は通常活用なし。 めり の活用法は けり に同じ。  
べし めり らむ らし は つぬ たる と結

合して つべし ぬべし たるべし づめり ぬめり たるらむ ぬらむ づらし ぬらし などを用ひらる。

五、動詞につきて希望の意を表すもの。

○たし

吾も 行きたし。  
君に 話したき ことあり。

右の たし は希望する意にして、第二段に附く。口語タイ なり。

たし の活用及法 形容詞と同じ。

行	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
きた	くた	くた	した	きた	けた

○なむ

吾も 行かなむ。

梅の 花 早く 咲かなむ。

右の なむ は 第一段につきて希望する意なり。活用なし。少しく古格なり。

六、名詞、動詞等に附きて指定の意を表すもの

○なり

我は 日本人なり。

人が くるなり。

悪しき とは なすべからざるなり。

右の なり は指し定むる意なり。口語の ナ、ヂヤ、デアル なり。

○なり の活用及法

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
く	る	ら	り	り	る
人	な	ら	り	り	る
					れ

終止法

我は 日本人なり。

我ぞ 日本人なる。

我こそ 日本人なれ。

連體法

日本の 名山なる 富士山は 駿河に在り。

假定法

日本人ならば 救はむ。

確定法

日本人なれば 救ふ。

なり は性状を表す體の詞に添ひては形容詞を作る。

錦は 甚 美麗なり。

活潑なる 少年こそ 頼母しけれ。

君 多忙ならば 我 代りて 行かむ。

夜は 静なれば 勉強するに よろし。

月 明に、星 稀に、鳥鵲 南に 飛ぶ。

右の 明に 稀に の には 中止法に用ひられ

たるものにて。ニアリ の に なり。

なり が動詞の第三段に添ひたる時は嘆息の意を表して指定の意なし。



虫の聲 すなり。

なり は弟なる者 父なる 人 などとは云はるれども、尊氏なる 者 彼なる 者 などいふとなし注意すべし。

なり は又の に在る などの義に用ひらる。

駿河なる富士山。東京なる九段坂。

○たり

彼も また 當世の 人たり。

かゝる 事は 人たる 者の すべき 事は。

右の たり は其意は、なり に同じ。

たりの活用及法も亦、は、なりに同じく、形容詞を作るにも用ひらる。

七、動詞形容詞及名詞等に附きて比況の意を表すもの。

○でとし

光陰の 速なるを 白駒の 隙を 過ぐるをとし。

彼の 人は 賢きが如く 又 愚なる如し。

光陰は 矢の如し。

彼が如き 功烈は 卑むべし。

右は比ふる意なり。さて動詞形容詞は第四段より直に又はがを挿みて承け。名詞はのがより承く。

でとし の活用及法

行	く	で	と	く	で	と	く	こ	と	し	で	と	き
		第一	第二	第三	第四	第五							

彼のが

終止法

光陰は 矢のときとし。 光陰が 矢のとき。

中止法

早き と 馬の如く、遅き と 牛の如し。

連名法

彼がとき 人 蓋 鮮し。

假定法

若 君が いふごとくは せむかた なし。

第五段には 如くあれ 又は 如くなれ といひて

ごとけれ といはせ。

左の文の誤を正し、口語を直せ。

一、早くくるべし。

二、勉強せらるべき時に 勉強せされは

後にて 悔ゆるとも、せむなかるべし。

三、彼は 愚人とこそ いふべし。

四、汝が いふ 事 げにも 理なれと 申せ

し。

五、何の 用意も 御座なく候へども 御出で

下されまじくや。

六、缺席は せまいと 思へり。

七、學生と 云はれるべき 者は 軽々しき

舉動を するべからず。

八、昔 爲朝なる 者 ありき。琉球に 王たり

しといふ。

九、若、曇れらば富士の頂は見えるまじ。

十、覚えまいと思ふたれどよく聞へたる。

十一、如くしに塵を捨てべからず。

十二、起さるべき時刻はきぬる。いざ起

きよ。

十三、人に怨まるゝの如き事はするまじ。

十四、彼こそ眞の學生なりと誰も申する。

十五、答案をかくには筆を用ゆるべし。

第十二章 活かぬ助辭

一、名詞代名詞に添ふ助辭——名詞代名詞の格

○がすの

花が咲く。

春風の吹く。

右のがのは主格に添ひて、動詞との關係を示す

ものなり。

櫻の花は美し。

我が家は狭し。

右ののがは定限格・領格・持格に添ひて、他の名詞

との關係を示すものなり。

○を

犬猫をかむ。

右のをは賓格・目的格に添ひて、他動詞の目的を示

すものなり。  
鳥 空を とぶ。  
右の を は賓格(副格)に添ひて、動作せる場所を示したるものなり。

○にの  
吾も 學校に 行く。  
右の に は賓格(副格)に添ひて、動作の目的を示すものなり。

○へ  
大佛は 南へ 向きたり  
右の へ は賓格(副格)に添ひて、動作の方向を示すものなり。

に と へ とは區別して、用ひざるべからず。

汽車に 乗るとて、 かなたへ 行きたり。

馬に 乗らむと 思ふ ものは 向へ 行け。

東へ 行く 人は ことゝに 居れ。 西へ 行く

人は 向へ 渡れ。

○より から

余は 東京より 歸りぬ。

彼は 此處から 行きたり。

右の より から も賓格(副格)に添ひて動作の起點を示すものなり。其の中 より は比較を示す事あり。

東京は 西京より 賑なり。

彼は 我より 賢し。

○ま

余は 東京まで 行く。

右の「まで」も賓格(副格)に添ひて、動作の止る處を示すものなり。

○と

人と 争ふ。

桑田 變じて、海と なる。

余 君と 行かむ。

右の「と」も賓格(副格)に添ひて動作の目的、移行く物等を示すものなり。

孟子は 「性 善」なりといへり。

「善は 急げ」といふ事あり。

「これこそ よけれ」と 仰せらる。

「あすより 勉強す」と 誓へり。

「待て 志はし」と 呼ぶ。

右は文句を賓格名詞として「と」が添ひたるなり。かかる場合には「と」は必、其の終止法・命令法に添ふものなり。故に左の如きは誤なりと知るべし。

「吾も くる」と 云ひたり。

「明日 勉強せし」といへり。

「あすこそ 行かむ」と いふ。

「これ、は 善き」と いはずして、「彼をば 悪しか

らぬ」と 申しき。

「と」は、又名詞を並べ用ふる時に用ひらる。

君と 我と 並行かむ。  
 梅と 櫻とを 植ゑたり。  
 筆と 紙と 墨とを 買ひたり。  
 右等は賓格に添ひたるものにあらず。かく名詞を並ぶる時に と を省くとあり。

櫻と 梅と

山と 川と

されど と を省く時は意味に不明を生ずるとあり。

をぢと をばの 子を 招きたり。

近衛師團と 第六師團の 或る 部分が 先鋒

たりき。

○にて もて して

机は 木にて 造くる。

學校にて 習ひたり。

筆もて かきたり。

人して いはむ。

右等も賓格(副格)に附属するものなり。

○よ

君よ 待ち給へ。

右の よ は呼格(獨立格)に添ひて、呼びかくる言葉なり。

り。

○右の外

我は 日本人なり。

鯨は 哺乳動物なり。

なぞいふ文に於て 日本人 哺乳動物 なぞいふ名詞は同格(説明格)といふ。

左の文に就きて、名詞、代名詞の格を擧げよ。

- 一、人は 萬物の 靈なり。
- 二、將軍 兵を 遼東に 進む。
- 三、余が 友は 英語を 米人に 習ひたり。
- 四、春は 花 咲き 鳥 鳴く。
- 五、學校には 行かざりしも、書物は 日に讀みぬたり。
- 六、生徒に 足袋を はく 之を 禁ず。
- 七、生徒の 股引を はく 之を 禁ず。
- 八、學校は 股引を 生徒の はく 之を

禁じたり。

- 十、てふくく てふくく 菜の 葉に とまれ。
- 十一、父は 筆と 紙とを 余にも弟にも賜ひたり。
- 十二、余は 東京より 京都に、京都から 大阪へ汽車にて 旅行したり。
- 十三、人の 世の 富は 草葉に おく 露の 風を まつ まの 光ありけり。

二、種々の語に添ふ助辭

○は

花は 赤く、葉は 青し。  
行かむとは 思はざりき。

○ 樂しくはあれど歸りなん。

かくてはあし。

○ 今は來つ。

右の は は差別する意なり。

是をば 取り 彼をば 捨つ。

○ 右の は は の 濁りたるなり。

○ も

花も 美しく、葉も 美し。

是をも 取り、彼をも 取る。

行かむとも 思へり。

樂しくも あり。

かくても よし。

○ 今も 來つ。

○ 右の も は並ぶる意なり。

○ 列

花が 美しき。

是をが とりたる。

行かむとが 思へる。

樂しくが 思ふ。

かくてが よき。

○ 今が 來つる。

右の が は一を取り擧げたる意なり。 が あると

きは形容詞・動詞・助辭・皆第四段にて終止するとは既に

云ひたるがごとし。



此の ぞ は又指し示す意にて第四段に附き文を結ぶことあり。

敵は 已に ひるみたるぞ。

なご 我をば 打つぞ。

持つべき 者は 子なるぞや。

舟子ども 早く 漕げ 風は 善きぞ。

「そは誰ぞ」「しか言ふは口先のみぞ」「我が國體は世界無比ぞ」などは ぞ の上に なる を省きたる意なり。

○なん

「花なん 美しき。

「是をなん 取る。

行かむとなん 思ふ。

樂しくなん ある。

かくてなん よき。

今なん 來つる。

右の なん は ぞ とほゞ同じ意なり。其の結も亦

ぞの結に同じ。

○こそ

花こそ 美しけれ。

是をこそ 取りたれ。

行かむとこそ 思へ。

樂しくこそ あれ。

かくてこそ よけれ。

今こそ きつれ

右の こそ は ぢ の一層重き意なり。こそ  
結は第五段なるとは既に説けるがごとし。

○し

神し 知らむ。

是をしも 忍びは 何をか 忍びさらむ。

今し 行けり

必しも 知らず

右の し は強く指す意なり。

○だに すら

心だに よくは 何ぞ 容の 醜きを 憂へむ。

かくてだに あらば 何をか 求めむ。

禽獸すら 恩を 知る 況や 人をや。

右の たに すら は口語の デモ サへモ など  
の意なり。

○さへ

雨 降り、風さへ 吹き添ひたり。

月 明にして、飛ぶ 雁の 数さへ 見えたり。

右の さへ は口語の マデ などの意なり。

○のみ はかり

我のみ 行く

是をのみ 取る。

思ひてのみ 暮す。

かくてのみ 過ぎむや。

月ばかり 見る。

是ばかり取る。

右ののみはかりは他に無き意なり。

ばかりはの程なほいふ意に用ひらるゝとあり。

今十丁ばかり行きたり。

一月に千圓ばかり費す。

一年ばかり勉強したり。

○や

花や咲く。

是をやとる。

楽しくや思ふ。

の意かくてやあるべき。

右のや疑ふ意なり。やは四段にて結ぶ。

○か

誰かといふ。

何をかとる。

如何にかせむ。

いつか行かむ。

右のかも疑ふ意なり。かも四段にて結ぶ。

やかが動詞・形容詞・助動辭の下に添ふ時はや

は第三段に、かは第四段に添ふ。

咲くや。咲くか。

恨むや。恨むるか。

賢しや。賢きか。

人なりや。人なるか。

せ・せや。 せ・さるか。  
降り・きや。 降り・じか。

代名詞の疑稱には や を添へず。

誰をや 求むる。

何處にや 行きたる。

彼は 誰なりや。

是は 何と いふや。

右のことはよからず。

誰をか 求むる。

何處にや 行きたる。

彼は 誰なるか。

是は 何と いふか。

右のごとく か を用ふべきものなり。

や か 四は場合によりて、反對の意となるとあり。

吾 豈 金錢を 惜まむや。

何時までも かくてや は あるべき。

いかでか 行かむ。

月 花をのみ みるべき ものかは。

右は否定の意に用ひられたり。

左の文に誤あらは正せ。

一、君は 花見に 行かざるや。

二、けふこそは 花見に 行かむ。

三、これが 水と なるか。

四、君は 軍人と なるや。

五、思ひきや、雪、ふみわけて、君を、見むと

は。

六、これは、信なるや、否や。

七、是を、取らむや、將、彼を、取らむか。

八、何を、するや。

九、何處にや、行きぬる。

十、君は、行かずか。

十一、何を、植えるや。

十二、恨みる、ことなきや。

十三、花、咲きぬるやと、尋ねたる。

十四、歳は、幾つなるや。

十五、悪しきや、よしや、知る、由も、なし。

十六、御出下さる、まじきや。

十七、おのれさへ、知らざるに、いかぞ、人に

教へむ。

十八、家貧しきに、其の身すら、病めり。

十九、百萬の、兵をたに、恐れざる、者、豈

一人を、恐れむや。

三、動詞・形容詞等に添ふ助辭

○は

花咲か<sup>は</sup>、美し<sup>は</sup>からむ。

美しく<sup>は</sup>、植ゑ<sup>む</sup>。

行かず<sup>は</sup>、見ゆ<sup>まじ</sup>。

咲き<sup>なほ</sup>、美し<sup>は</sup>からむ。



右の **は** は第一段に添ひて假定の意を表すものなり。

咲け**は** 美し。

美し**けれは** 植う。

行か**ねは** 見え**ず**。

咲きぬ**れば** 賑か**なり**。

右は第五段に添ひて、確定の意を表すものなり。

○ **とも**

晴る**とも** 行く**まじ**。

勉強**すとも** 落第**せむ**。

勉強**せずとも** 及第**せむ**。

咲きぬ**とも** 見る**まじ**。

右の **とも** は動詞助動詞の第三段に添ひて假定の

意を表すものなり。但、逆態なり。

美しく**とも** 植**ゑじ**。

必要の物は 價 高く**とも** 買**はむ**。

右の如く形容詞には第一段に添ひて、假定の逆態を表す。

○ **ぞ**

咲け**ぞ** 美し**からず**。

美し**けれぞ** 植**ゑず**。

呼べ**ぞも** 答へ**ず**。

やす**けれぞも** 買**はず**。

行か**ねぞも** 見ゆ。

行きぬれども 見えす。

右の ど ども は第五段に添ひて、確定の逆態を表す。

○に を が

日は 暮れかゝるに、宿るべき 家 なし。

かく 寒きに 羽織たに 着す。

人は 行かぬに 吾のみ 行く。

人は 行きたるに 吾は 行かす。

夏の 夜はまだ 宵ながら 明けぬるを 雲の

何處に 月 宿るらむ。

今は 内實 狂瀾の 世なるを いかで 太平

に 酔はむ。

余は さは 教へざりしを なぞ 従はざる。

君は 三度 余を 訪ひたるを 余は いまた

一度も 返禮せず。

雨は 降るが 風は 吹かす。

昨日まで 暖なりしが 今日はいと 寒し。

大學へと 志したるが 中途にて 方針を 變

へたり。

此等は皆第四段に添ひて逆態の前提法となるものなり。その中を古く、がは新し。

○て

行きて 遊ぶ。

學びて 習ふ。

柔く・て 甘し。

静に・て 寂し。

寝ね・す・て 讀む。

右の て は第二段に添ひて、而レテ の意を表す。

○して

小ナく・して 強し。

静に・して 寂し。

滔々と・して 流る。

見・て・して 歸る。

右は形容詞・或は助辭の第二段に添ひて、て とは

同じ意を表す。

○で

讀ま・で 聽く。

寝ね・ぞ 見る。

右は動詞の一段に添ふものにて、ズテ の約なり。

○つゝ

行き・つゝ 見る。

見・つゝ 行く。

右は動詞の第二段に添ふものにて、ナガラ の意な

り。

○かし

切に 苦しき 時は 死なむと・しも 思ふが・か

し。

疾く 起きよ・かし。



いと悲しくも 覺ゆかし。

右は動詞形容詞の第三段、其の他語句の完結したる者に添ひて軽く指し定むる意なり。

左の文の誤を正せ。

- 一、若 雨降れば 行くまじ。
- 二、假令 天寒けれども 行かむ。
- 三、見ぬとも 口惜しくは 思はじ。
- 四、假令 花は 咲きぬれども、見る 人なからむ。
- 五、勉強するとも 落第すべし。
- 六、晴れぬるとも 行くまじ。
- 七、假令 如何に 小々けれども、三尺に 足

らぬ 人 あるべきとは 思はれぬ。

- 八、日の 暮れぬ 中に 着くべしと 日ふて 行きたり。
- 九、學むで 時に 之を 習ふ。
- 十、けふ 行かずんば 花も 散りなむ。
- 十一、今 皆 讀みつゝ あると いふ。
- 十二、友を 訪ふて 逢はぬぞ 口惜しけれ。

四、感動を表す助辭

○や 行けや 君。

浦目しや 彼に はかられたり。

難波津に 咲くや この 花。

○も

瓢・や 瓢・や 吾 汝を 愛す。  
古池・や 蛙 飛び込む 水の 音。  
今・や 天下 太平・なり。

いと・も かしこし。

必し・も 然らず。

○は

何・か・は せむ。

我のみ 降らむ・や・は。

○な

いと・も 哀し・な。

花の 色は 移りにけり・な。

○よ

鳴け・よ 鶯。

月・よ 花・よ。

弘安の 頃か・と・よ。

○かな かも

盛なる・かな 明治の 代。

楽しい・かな 此の 遊。

三笠の山に 出でし 月・かも。

左の助辭を説明せよ

人・が 行く。 君・が 代。 習ひしが 忘れたり。  
雨の 降る。 櫻の 花。  
枝を 折る。 道を 行く。

山に登る。止むるに止まらず。春はきにけり。  
 月と花と。山といふ。  
 我は行く。いかゞはせむ。  
 月をば見る。晴れば行かむ。降ればこす。  
 我も行く。いともよし。  
 春やくる。行けや君。花咲くや。  
 見るとも見えじ。かくとも思はず。  
 行くな。哀しな。  
 花なんさく。咲きなむ。咲かなむ。  
 起きよ。月よ。花よ。

学校より 歸る。 吾より 高し。

第十三章 接頭語接尾語

前に説ける品詞及助辭の外に接頭語接尾語といのものあり。他の語に接して熟語となる。

一 接頭語

小川 御代 御名 御先祖 眞心 生糸 素顔 諸人

右は意義あるものなり。

さ夜 さ迷ふ み笠山 み岬 い座す いち著  
 し た靡く た易し 打ち語らふ 立ち別る  
 取り亂す 差し支へ 搔き曇る もてはやす

相願ふ

右は殆ど意義なきものなり。

二、接尾語

吾等 小兒等 兒ども 筆墨など

右は名詞代名詞の複数を表すものなり。

彼の 顔は 賢げなり。

嬉しさ いはむ かたなし。

深さ 三尺。

右は形容詞の語根につきて、名詞を形造るものなり。

稍 春めきたり。

彼も 嬉しがりき

人の 面白がる 事を 話せ。

高ぶれば 却て 卑めらる。

少年にして 大人ぶる 者あり。

右は他語を動詞に形造るものなり。

彼は 女らしき 男なり。

兒供らしく 見ゆ。

右は他語を形容詞に形造るものなり。

これ等の外、左の如きもの皆接尾語といふ。

家ごとに 立つ。 一人づつ 見よ。

それほど かく。

歩みながら 談る。

路すがら 景色を 眺む。

散歩が 友を 訪へり。

此の 畫は 見るからに 目さむる 心地す。  
 教の・まゝに 勉めよ。  
 右は他語を副詞にするものなり。

普通文法教科書中卷終

柿本人麿藏書



明明明明明明  
 治治治治治治  
 三三三三三三  
 十十十十十十  
 七六六五四四  
 年年年年年年  
 四四四三三三  
 月月月月月月  
 十廿十 二八五  
 二五九 十  
 日日日日日日  
 六五四三再發印  
 版版版版版  
 發行發行發行  
 行行行行行刷

定價表		
上卷	貳拾貳錢	
中卷	貳拾五錢	
下卷	貳拾貳錢	

明治三十四年九月廿五日  
 中學校用文部省檢定



著者 三 矢 重 松  
 著者 清 水 平 一 郎  
 發行者 三 樹 一 平  
 印刷者 宮 本  
 印刷所 東京市神田區錦町一丁目十番地  
 東京市神田區雜子町三十四番地  
 東京市神田區雜子町三十四番地

發行所 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目  
 (電話) 本局二四三三八番  
 大阪市東區備後町四丁目  
 (特電) 話東四三番

明治書院 吉岡平助

